

文学部

文学部生の

5

リアルな！

vol.23

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。



ムイトプラゼール！

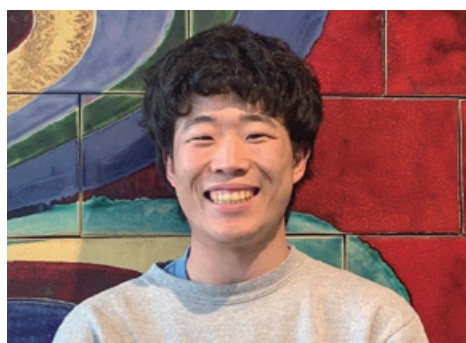
この言葉の意味は、ポルトガル語で「初めましてー」です。実は、私はこの単語を2018年の1月に、ブラジリアンレストランで何度も使うことになりました。いったいなぜでしょうか？それは、「GSP（グローバル・ソシオロジー・プログラム）」という授業の履修に端を発します。入学して間もないころ、右も左もわからず友だちもできなかったけれど、何か新しいことをしなければという春の脅迫にかられて履修を決意しました。このプログラムの目的は二つあり、一つは拙くてもいいのでとにかく英語で話してみることに、二つ目は英語を使って社会学の研究をプレゼンすること。書いている通り私は哲学専攻ですし、英語が苦手な



東アジア国際学会後に受講者全員で一枚

ワットイスネットワーク？

私の班の研究テーマは「横浜市鶴見区にあるブラジル人ネットワークの効用とは何か」でした。工業地帯が近い鶴見区には、ブラジルからの出稼ぎ労働者（その多くが配管工、電気屋、工場勤務）が多数在住し、相互に協力して大きなネットワークを形成しています。そのネットワークはなぜ存在するのかということが私たちの関心事でしたが、それを調べるためには大きなネットワークの中心がどこにあるのかを見



多角的な学びに挑戦する筆者

多様な「ことば」でつながる、みつける、うごきだす

栗山 浩輔

文学部人文社会科学部哲学専攻2年
千葉県立成田国際高校出身

のでなかなか無謀な挑戦でした。
つけ出さなければいけません。鶴見区へ調査に行くことはもちろん、私たちは何度もNPOや図書館に行き、さらには同様の事例を探るべく群馬県大泉町のブラジル人コミュニティへフィールドワークに行きました。そして、最後には鶴見区のブラジル人ネットワークの中心が「レストラン」にあるのではないかという結論に至ったのです。

フェイジョアーダエゴシュトーズ

これはポルトガル語で「フェイジョアーダ（ブラジルの豆料理）はうまい」



ブラジルの家庭料理：フェイジョアーダ

べている最中に知らぬ日本人からいきなりインタビューをされ

という意味です。先の結論に至ってからは、レストランにいるブラジル人にインタビューするためにはブラジル料理を食べ続ける日が続きました（「ブラジル料理はとてもおいしいです。ぜひ」）。インタビューは、見知らぬブラジル人いきなり「ムイトプラゼール！」と言って始まります。大学でセッティングされた場所で留学生と話すのとは訳が違います。日本語が通じる方には日本語で、あまり得意でない方とは互いに拙い英語で話すというカオスな状況でした。しかしブラジル人の方は優しく、ご飯を食べ

でも、いつさい嫌な顔をせず引き受けてくれました。それも全員です。彼らと話すのは楽しく、彼らの家族や仕事、宗教、生活、余暇についてなど、興味深い話をいくつも聞くことができました。本当にオブリガード。

アンニョンヒカセヨ!

この言葉の意味は韓国語で「またね!」です。3月になって研究結果もまとまり、英語でのプレゼンの練習も佳境に入りました。そして、なんとこの授業のクライマックスは、社会学の東アジア国際学会でプレゼンすることでした(私たちの班の研究結果はまた機会があればお見せします)。当日は各国の社会学者が一堂に会し、それぞれ研究発表を行いました。緊張はしましたが、私たちもうまく発表できたと思います。そのなかでとてもうれしいことがありました。それは、韓国のソウル大学の教授と話をしたこと。社会学の知識がない私は韓国のアイドルの話しかできませんでしたが、拙い英語でも通じ合えることに何か特別なものを感じました。また、独学で勉強した韓国語をとにかく使って話すと喜んでくれたことも印象的でした。大学と鶴見区に毎日通いつめるなど大変なこ

とも多かったです。この授業を履修したことは私の大学人生に大きな意味を残しました。

光陰如箭(光陰矢の如し)

一つの授業にフォーカスを当てましたが、最後に少しほかのことも書いておきます。私は自分の専攻では日本思想を学びたいと考えています。そのためには、右記のような漢文が読めなくてはなりません。また、哲学を学ぶには

ドイツ語も欠かせません。幸運なことに、1年次の授業では漢文、ドイツ語、英語、韓国語、ポルトガル語に触れることができました。これは中央大学文学部ならではのことだと思えます。さらに私は今夏、韓国に短期留学に行く予定です。光陰矢の如し、時は矢のように速く過ぎていきます。何かに従うのではなく、能動的に、柔軟に、さまざまなことに取り組んでいこうと思えます。



多摩地域の神道について学ぶ(大学にて)

相談する力

文学部事務室
キャンパスソーシャルワーカー
細見麗子
米澤篤代



From the Faculty of Letters



文学部 だより

文学部事務室におりますと、さまざまな学生が履修や各種手続きなどの相談に来るのを見かけます。その中には、私たちキャンパスソーシャルワーカーに相談しに来る学生もおります。

中央大学には、キャンパスソーシャルワーカー(以下CSW)という職種が複数名おり、文学部には2名在籍しております。おそらく保護者の方々が大学生だったころにはなじみのない名前だと思えますが、CSWは学生の学修上の問題や大学生活・対人関係の相談を受ける、学修面で困っている学生を教員とつなぐなど、学生が大学生活での悩みや困

り事を主体的に解決していけるようサポートする仕事をしています。

CSW相談を利用しながら、学生たちは自分の気持ちや考えを言葉にして整理したり、最初は難しいと思った授業や課題にも悩みながら取り組み、実際に「やってみたらできた」という経験を積み重ねていきます。また、こうした「相談」は単に問題解決をすることだけに終わりません。大学卒業後、就職や進学で新たな環境に入っていく場合に、この「相談する力」が必要になります。「相談」によって、自分一人では解決できない問題を他の協力を得て解決できたり、アドバイスやアイデアを

得て、物事を良い方向に導いたり発展させたりすることもできます。そうした発展的な「相談」ができるためには、自分のニーズや困っていることが何なのかを自分で考えて言葉にし、ほかの人にそれをわかりやすく伝え、協力をお願いするといった「うまく相談する」というスキルも必要になります。

CSW相談では、大学入学前は自分で相談するという経験がなかった学生にも、主体的に相談をしながら問題解決をするという経験を積んでほしいと思っています。